

詩集『鈴の音』より (2) ——イクバルのウルドゥー詩 (15) ——

松村 耕光* 訳

はじめに

本稿は、イクバル (Muhammad Iqbal, 1877-1938) の、以下の初期ウルドゥー詩4篇の翻訳である。いずれも第1ウルドゥー詩集『鈴の音 (*Bāng-e Darā*, 1924年)』第1部に収録されている。

1. 「苦しみの叫び (*Ṣadā-e dard*)」 インドの分裂状況を嘆いた憂国の詩である。ラホールのウルドゥー語雑誌『宝庫 (*Makhzan*)』1902年6月号に掲載された。

2. 「望み (*Ēk ārzū*)」 社会の喧騒から逃れようという気持ちと社会に関わらなければならないという思いの相克が描かれた興味深い作品である¹⁾。『宝庫』1902年12月号に掲載された。

3. 「詩人 (*Shā'ir*)」 短いイクバルの詩人観がよく表れている作品である。イクバル詩注釈者メフルは、『宝庫』1903年12月号に掲載されたと記述しているが²⁾、『宝庫』当該号が見つかっておらず、未確認。

4. 「暁の星 (*Ṣuḥḥ kā sitārah*)」 国のために自ら進んで戦場に赴こうとする夫を黙って見送る妻の姿が活写された作品である。『宝庫』1904年12月号に掲載された。

イクバルが西欧に留学する1905年以前の初期の詩は、第1ウルドゥー詩集『鈴の音』掲載時にかなりの削除、修正が行われている——詩集に収録されなかった作品もかなりの数に上っている——。西欧留学以前のイクバルの文学や思想の研究は、言うまでもなく、その時期に発表されたテキストに基づかなければならないが³⁾、初出(あるいは初出に近い)テキストを見つけるのはかなり困難である⁴⁾。幸い、「詩人」以外の詩は、『宝庫』のテキストを入手することができたので、今回は、詩集『鈴の音』のテキストを基本としつつ、詩集収録時に削除された詩句を斜体で追加して翻訳した。詩句順序の変更等に関しては註で指摘することとした。意味上違いの出ない語句の変更に

* 大阪大学名誉教授

1) 英詩人 Samuel Rogers (d. 1855) の詩 “A Wish” に基づいているという指摘があるが (Gyān Chand, *Ibtidā'ī Kalām-e Iqbal: bah tartīb-e mah-o-sāl*, Hyderabad, 1988, p. 185)、詩想は全く異なっている。

2) Ghulām Rasūl Mīhr, *Maṭālib-e Bāng-e Darā*, Lahore, 1982, p. 63.

3) 本誌にこれまで翻訳した初期詩は詩集『鈴の音』のテキストに基づいており、詩集収録前に雑誌等に掲載された初期のテキストを入手し、それに基づいて翻訳し直さなければならないと考えている。前回紹介した詩「ヒマラヤ」は、『宝庫』1901年4月創刊号に掲載されているテキストに基づき、『宝庫』掲載時の題名「ヒマラヤの山並み (*Kōhistān-e Himālāh*)」で『印度民俗研究』別巻6(2020年)に翻訳を発表したので参照されたい。

4) 詩集収録時に削除された詩句を集めた以下のような拾遺集があるが、どの部分から削除された詩句なのか言及されていないことが多く、発表当時のテキストを復元することは不可能である。拾遺集には詩集に収録されなかった詩も収められているが、信頼できるテキストなのかどうか、判断し難い。

Muhammad Bashīr al-Ḥaqq, *Islāḥāt-e Iqbal*, Patna, 1950.

Sayyid 'Abd al-Wāhid Mu'īnī, *Bāqiyāt-e Iqbal*, Lahore, 1952.

Muhammad Anwar Hārith, *Rakht-e Safar*, Karachi, 1952.

Muhammad Bashīr al-Ḥaqq, *Tabarrukāt-e Iqbal*, Delhi, 1959.

Ghulām Rasūl Mīhr, *Sarōd-e Raftah*, Lahore, 1959.

'Abd al-Ghaffār Shakīl, *Nawādir-e Iqbal*, Aligarh, 1962.

Faqīr Sayyid Wahīd al-Dīn, *Rōzgār-e Faqīr*, vol. 2, Karachi, 1965 (second impression).

Ṣābir Kalārwī, *Kulliyāt-e Bāqiyāt-e Shi'r-e Iqbal*, Delhi, 2005.

ギャーン・チャンドは、削除された詩句を現行テキストに追加した画期的な *Ibtidā'ī Kalām-e Iqbal: bah tartīb-e mah-o-sāl*, Hyderabad, 1988 を編集しているが、雑誌等に掲載された初期テキストすべてを現認して追加している訳ではないので全面的に信頼することはできない。

関しては、特に指摘しなかった。

苦しみの叫び

悶々として一時の安らぎも得られない
さあ、ガンジス河の渦よ、私をその中に沈めて欲しい
おお、ヒマラヤよ、山裾に私を隠して欲しい
巣にいるのは不安だから⁵⁾
悲嘆に耐えて久しい
ここを祖国と呼ぶのは恥ずかしい
ああ、ここで作られたものすべてに荒廃が宿っている
巣作り? 秋に害されたこの薔薇園で?
このような薔薇園に巣など作れようか
仲間たちの破滅を見ておられようか
我が祖国は対立を煽っている
一緒になるどころか、人々は傍にいるのに離れようとしている⁶⁾
同じ色に染まるどころか、よそよそしい態度をとっているとは
同じ麦叢の麦であるのに互いに疎ましく思っているとは⁷⁾
花々に友愛のそよ風が訪れないような花園——
そのような花園に歌う歓びなどはない
私は真の親しさもたらさず歓びに焦がれている
私は波と岸との衝突に悩まされている⁸⁾

奇跡のような表現力を持つ詩人は麦叢全体を映し出す実である
麦叢がなければこの実は存在できようか
求愛者がいないのに佳人はその姿を見せてくれるであろうか
宴がなければ燃える蠟燭に何の意味があるろうか
「話す意欲」はどうして沈黙に取って代わられないのであろうか

5) 自分を鳥に見立てている。

6) 『宝庫』ではこの詩句は第2連「さらば、甘美な言葉を発したナーナクの地よ / さらば、イエスのようであったチシュティーが眠る地よ」の後にあり、「我が祖国」は「おまえの祖国」と記されている。

7) 『宝庫』ではこの詩句は第2連「友愛の秘密を我が祖国の人々は忘れ / 世界という戦場に立てなくなってしまった」の後にあり。尚、「麦叢(khirman)」とは、刈り取られて積み上げられた麦のことである。

8) 『宝庫』ではこの詩句は第2連「自分の本質を知らぬとは何という者たちなのであろうか / 仲間をよそ者と思うとは何と無知な者たちなのであろうか」の後にあり、「花々に友愛のそよ風が訪れないような花園—— / そのような花園に歌う歓びなどはない」の句の後は、「奇跡のような表現力を持つ詩人は麦叢全体を映し出す実である / 麦叢がなければこの実は存在できようか」の句が空白なしに続いているが、詩集『鈴の音』では、この「奇跡のような……」の詩句から第2連が始まる。

私の鏡からどうしてこの輝きは消えないのであろうか⁹⁾
 何という時期に私の「話す喜び」は口を開いたのであろうか
 争いの焰が花園を焼き尽くしてしまったというのに

おお、中央アジアの荒野よ、私を呼び戻して欲しい
 ああ、もうこの街にはいられない¹⁰⁾
 アトック川に浮かぶ舟よ、再び私を乗せて向こう岸に渡して欲しい
 最早この国の花園の香りは私の心を楽しませてはくれぬ
 さらば、ゴータマの生誕地よ
 おまえの風景はよそよそしく見える¹¹⁾
 さらば、奇跡の息吹の持ち主であったフジュウィーリーが埋葬された地よ
 さらば、魅惑的な論述を行ったシャンカラの眠る地よ¹²⁾
 さらば、シーラーズの長老が散策した地よ、さらば
 美の創り手であったヴァールミーキの国よ、さらば¹³⁾
 さらば、甘美な言葉を発したナーナクの地よ
 さらば、イエスのようであったチシュティーが眠る地よ¹⁴⁾
 友愛の秘密を我が祖国の人々は忘れ
 世界という戦場に立てなくなってしまった
 自分の本質を知らぬとは何という者たちなのであろうか
 仲間をよそ者と思うとは何と無知な者たちなのであろうか
 ずっと恐れていた日が訪れようとしている
 存在の頁から名前が消されようとしている
 心は哀しみ、魂は計り知れないほどの悲嘆に囚われている
 ああ、一冊の書物であったのに、綴じ糸が取れてしまっている
 所属集団の区別に祖国の人々は夢中になり
 繯れをさらに繯れさせている
 確かに宗教は人間の命である
 そのおかげで人間は何とか威厳を保つことができている

9) 鏡から輝きが消えないように、話す(詩を作る)意欲が消えないということ。

10) 『宝庫』ではこの詩句から第2連が始まる。

11) 『宝庫』では「ゴータマ」に「すなわち、ゴータマ・ブッダ」という註が付けられている。

12) 『宝庫』では「フジュウィーリー」に、「サイイド・アリー・フジュウィーリー (Sayyid 'Alī Hujwīrī) 別名ハズラト・ガンジ・バクシュ (Hazrat Ganj Baksh 宝物を授ける御方)」という註が付けられている。ガズナ出身のスーフィー (d. 1072 (1076)) で、ラホールに廟がある。ウルドゥー語ではハジュウエーリー (Hajwērī) と発音される。

『宝庫』では「シャンカラ」に、「スリー・シャンカラチャーラジュ (Sri Shankarāchāraj, Shankarāchārya の異形 Shankarāchārja を Shankarāchāraj と表記したものと思われる)、古代インドの哲学者」という註が付けられている。ヴェーダーンタ学派に属し、不二元論を大成した宗教哲学者 (d. c. 750)。

13) 「シーラーズの長老」 シーラーズ出身のパルシア詩人サーディー (Sa'dī, d. c. 1292) のこと。インドに滞在したという伝説がある。

『宝庫』では、「ヴァールミーキ (Vālmiki)」に、「古代インドの詩人」という註が付けられている。叙事詩「ラーマヤナ」の作者とされる伝説上の詩人。

14) 「ナーナク (Nānak, d. 1538)」 シク教の開祖。

『宝庫』では「チシュティー」に、「ハージャ・ムイーヌッディーン・チシュティー (Khawājah Mu'in al-Dīn Chishīrī)」という註が付けられている。南アジアにおけるチシュティー派スーフィー教団拡大の基礎を築いたスーフィー (d. 1236) で、アジュメールに廟がある。

この方途によって魂は美しくなり

この霊薬によって人は素晴らしい人間になることができる

しかし、宗教によって民族性の色が変わることはない

父祖の血が体の血管から流れ出ていくことはない

宗教はみな、無始の佳人と会うための方途である

すべて、存在という詩の手帳への註釈である¹⁵⁾

心の目は同じ酒に酔っているのに

このような対立がどうして我々の宴の仕来りとなっているのであろうか

望み

この世の宴には嫌気がさしている——おお、神よ

心が冷えきっているのに宴など楽しめようか

私は喧騒を避けている——心が求めているのは

言葉が身を捧げるような沈黙

私が渴望しているのは静寂——私が望むのは

山の麓の小さな小屋に住むこと

この世の哀しみという刺は心から抜き捨てて

心配事から解放され、静かに日を送り

小鳥の囀りに歌の素晴らしさを

水が湧き出る音に楽の音を感じることに

花びらを見るのが私の読書

開いた薔薇の花が叡智の書物となること

蕾が開いて誰かからの音信たよりを伝えてくれること

この小さな盃が世界の様子を見せる盃となってくれること¹⁶⁾

私が望むのは、手が枕、草が敷布となり

「孤独」が「喧騒」を恥じ入らせるような魅力を持つてくれること

私の姿に慣れ

小夜啼鳥の小さな胸から私への恐れが消え去ること

両岸に緑なす樹木が並び

澄んだ水面にその姿を映して小川が流れ

山が素晴らしい景観を見せ

その景観を見ようと波となって小川の水が身を乗り出すこと

草が大地の懐でまどろみ

茂みの中を巡る小川の水が光り輝き

15) 「無始の佳人」神のこと。

16) 「誰か」神のこと。
「盃」薔薇の花のこと。

まるで美女が鏡に見入るかのように
 薔薇の枝が身を屈めて小川の水に触れること
 私が望むのは、太陽が夕刻の花嫁にメヘンディーを付けるとき
 どの花もみな赤みがかった金色の衣を纏い¹⁷⁾
 まるでどこかの街で誰かが疲れ果てて立ち止まるかのように
 赤い夕焼けが溪谷に立ち止まり
 まるで誰かに裾を引かれているかのように
 太陽が西に向かうこと
 私が望むのは、夜、旅する者たちが疲れ果てたとき
 私の碎けたランプが彼らの希望の光となること
 雲が空を覆い隠していたら
 稲妻が光って私の小屋を彼らに見せてくれること
 私が望むのは、明け方の郭公、あの朝の礼拝時刻告知者に
 声を合わせることに、郭公も私に声を合わせてくれること
 耳が偶像寺院やカアバ神殿の世話にならないこと
 小屋の隙間が朝を知らせてくれること¹⁸⁾
 まるで朝の眼にスルマーが付けられているかのように
 朝陽にまだ暗闇が混じっていること¹⁹⁾
 沐浴させようと露が花々に宿るとき
 泣くことが私の沐浴、泣き声が私の祈りとなり
 心ゆくまで祖国のために流した涙が
 希望の木を大きく成長させること
 静寂の中、高く舞い上がった私の泣き声が
 星の隊商への鈴の音となること²⁰⁾
 私が望むのは、苦しんでいる者たちがみな私の泣き声を聞いて涙を流してくれること
 そうなれば倒れている者たちが目を覚ましてくれるかもしれない……²¹⁾

私の詩が何か——インドの人々よ——理解して欲しい
 これは詩ではなく、詩となった嘆き
 柘植は薔薇の敵、薔薇はジャスマインの敵
 この花園は巣を作るには不適切
 一緒に住んでいるのに仲間をよそ者と思えようか
 私には祖国がない、何処にも祖国がない
 愛の陶酔をもたらしていた酒は最早ない

17) 「メヘンディー (mhēndī/ mēhndī)」ヘナ染料のこと。これで赤い模様を描き、手や足を装飾する。

18) 宗教施設が朝に発する音(鐘の音、礼拝への呼びかけなど)によってではなく、朝陽によって朝の到来を知りたいということ。

19) 「スルマー (surmah)」硫化アンチモン、硫化鉛の黒い粉。視力増強、美容のために使用される。

20) 「鈴の音」立ち上がる時に隊商の駱駝の首に付けられた鈴が鳴る。出発の合図ということ。星の隊商が出発するとは夜が明けるとのこと。

21) 『宝庫』ではこの句と次句「私の詩が何か——インドの人々よ——理解して欲しい」の間に空白がある。

酌人はおらず、宴が開かれることもない
「宴の席で友人たちは酒を飲み交わしていたが
私が飲む番になると杯に火が投じられてしまった」²²⁾

詩人

共同体は身体、諸個人は共同体の器官のようなものである
共同体の足が歩むのは産業化の道である
統治を行う人々の集まりは共同体の美しい顔であり
美しく詠う詩人は共同体のよく見える眼^{まなこ}である
身体の何処かが痛めば眼は涙を流す
眼はどれほど身体全体のことを思っていることか

暁の星

太陽や月と交わる欲びは捨てることにする
朝の到来を知らせる責務^{つとめ}を果たすのはやめることにする²³⁾
私の美しさは儂く、朝の光は私の敵である
私の美しさは太陽という君主の先駆けとなって得られたものである
星^{せかい}の街は私には相応しくない
高みにいるより地上の者たちのいる、低いところが相応しい
天空ではなく、虚無の世界が私の祖国である
至る所が裂けている朝の裾——それは私にとっては屍衣である²⁴⁾
私の運命とは毎日死んでは蘇ること
死の酌人の手から毎朝、酒を飲むことである
この責務、この榮譽、この高い位階は好ましいものではない
一時の輝きより暗闇の方が好ましい
可能であったなら、私は星にはなっていなかった
海底で輝く真珠となっていた——

もし波に揉まれて心が乱されたら
海を出て、首飾りとなっていた
美女を飾るのは
皇后の冠の飾りとなって光り輝くのは心嬉しいことである

22) 原文ペルシア語。引用符が付いているので引用句であると思われる。

23) 暁の星が発話している。

24) 朝になると星は消えてしまう。至る所が裂けている朝の裾、すなわち、筋状の朝の白い光は、暁の星にとっては葬送のために着せられる白い屍衣のようなものであるということ。

幸運であれば石のかけらは
 ソロモンの指輪を飾ることができるのである²⁵⁾
 しかしこのようなものは、結局、壊れてしまう
 高価な真珠も最後には碎けてしまう
 生とは死を知らぬことである
 死が不可避であるような生など生と言えるであろうか
 世界を飾ってもそのような結末を迎えるのであれば
 夜露となって花びらの上に滴り落ちようではないか

誰かの星形の額飾りに宿ろうか
 虐げられた人が発する嘆きの火花に宿ろうか
 涙となって睫毛の端に宿ろうか
 あの妻の目から滴り落ちようか
 愛国心に駆り立てられて戦の場へと
 鎧に身を固め、出発しようとしている者の妻の目から
 その妻は絶望と希望の表情を浮かべ
 その沈黙は言葉を恥じ入らせてしまう²⁶⁾
 夫の決意は妻に忍耐力を授け
 羞恥の念はその目に雄弁さを授けている²⁷⁾
 出征のとき、妻の薔薇色の顔は蒼白になり
 別離の哀しみでその美しさはいや増す
 どれほど妻がこらえても、私は滴り落ちる
 涙で一杯の眼の盃から溢れ出るのである²⁸⁾
 私と交わり、忍耐が血と化して溢れ出たようである
 私の中には憂慮の嵐が潜んでいるようである
 大地と交わり、私は無窮の命を得る
 私は世界に愛の焔を見せて去るのである

25) ソロモン (Sulaimān) は超自然的存在であるジンや人、動物などを服従させることのできる非常に貴重な魔法の指輪を持っていたという伝説がある。

26) 妻の沈黙が言葉以上に妻の心を雄弁に物語っているということ。

27) 夫の固い決意を前にして、妻は何も言えず、耐え忍んでいる。第2半句は、羞恥心故に胸の内を口には出せないでいるが、目が雄弁に妻の思いを語っているということ。

28) 『宝庫』ではこの詩句の第2半句は次のようになっている。
 心から強い酒のように溢れ出るのである